



特選 声はずむ 児等天真に逞しく

新海町 野田 惣次郎

(評) 少々腕白でもいい、健やかに元氣一ぱいに育ってほしいと願うのは親の常です。どの児も皆んな輝く未来を秘めています。子は宝です。児らの幸せと成長を念じての愛情が詩われた秀句です。

入選 声はずむ 駈けゆく少女風になる

犬上郡豊郷町 西山 芳子

(評) 靴を鳴らして園児等は足取りも軽く大地に躍る。緑の大地に青空に笑い声や歌声が健やかな風にこだまして、初夏のすがすがしい空に広がり消えて行く。

入選 光さす 万象嬉々と吐く命

蒲生郡竜王町 辻沢 春雨

(評) 生命の誕生の不思議、その源は陽の恵み、春の日向に微かな鼓動、陽の呼び掛けに応う様に、我が世の春と新芽は一斉に山野に謳歌する。人も又生命の尊さに感謝する。

特選 ネーミング ふる里背負う近江米

犬上郡豊郷町 北川 乙比古

(評) 天下一美味しいお米、その名も「みずかがみ」として新登場、近江の米所、古来にもまして産地の名声を高め、消費拡大への期待を込めて「中七」で上手く詠まれました。

入選 ネーミング 古きを訪ね城の町

普光寺町 河合 淳子

(評) 新しい時代を先取るとは、何を基準に求めるか、それは「故きを温め新しきを知る」彦根の町から多くを学び取る。其処から生まれる豊かな想像が出来る事でしょう。

特選 光さす 閉ざす心に慈母の声

田附町 佐々木 トミ

(評) 幾つになっても母さんです。何もかも、お見通し、多くを語らずとも、優しく、力強く慰め励まして呉れます。世界で一番大切な味方、お母さんありがとう。

入選 声はずむ 惜しまぬ苦勞叶う夢

甲田町 平田 政江

(評) 忍苦に耐えぬき一生懸命も心も目的に向かって立ち向かい励む頼もしい姿、結果叶った喜びと幸せ感がにじみ溢れ、生き生きとした感動が伝わって来る、「中七」の表現の切り込みも巧みな逸句。

入選 光 さ す 手慣れの鋏に春プラン

稲里町 藤野 千枝子

佳作 光 さ す 盲導犬に支えられ

松原町 大塚 博

(評)

待望の豊作へ、爽やかな陽春の光が湧きたつような自然の中で、熟達の土一筋に生きてきた誇り、天地の恩恵を胸に、大志を抱き大望へ前向きに生きる逞しき姿が浮かびます。

佳作 ネーミング 親から受けた宝物

新海町 今堀 敏子

入選 ネーミング 呼んで呼ばれて共白髪

長曾根南町 高 恵三郎

佳作 光 さ す 「再発なし」と太鼓判

犬上郡甲良町 上野 初子

(評)

永く連れ添う人生、その絆を秘めた皺の深さに、過ぎし歳月を想いかえしながら、何時となく呼び合い互いに寄り支え合い来た幾屋霜、ほのかな温かい人間模様が流れ来る抒情詩といえましょう。

佳作 声はずむ 満開に酔い城巡ぐる

鳥居本町 滝口 寿美夫

佳作 光 さ す 世界に映える富岳の美

田附町 上田 文子

佳作 ネーミング 商魂かける男意気

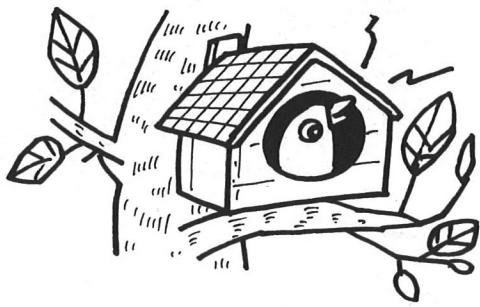
甲崎町 神崎 ひさ

佳作 声はずむ 五輪に花咲く金メダル

犬上郡豊郷町 赤塚 清女

佳作 光 さ す 眼帯はずす医師拝む

金澤町 浅野 成子



佳作 声はずむ 触れ合い温き百千鳥 ももちどり

東近江市 片岡 弘

佳作 光 さ す 迷わず生きて今がある

正法寺町 金子 君子

佳作 ネーミング 横文字並ぶ若い夢

田附町 大谷 貞三

佳作 声はずむ 合格知らず子の電話

大藪町 寺 阪 美智子

佳作 光 さ す 九死に一生得た医術

近江八幡市 辻 孝

佳作 ネーミング 親の想いを子が背負い

普光寺町 河合 仙治

佳作 声はずむ 螢雪堪えし学びの舎 や

犬上郡豊郷町 西山 肇

佳作 光 さ す 彼の日の挫折越えてこそ

日夏町 大菅 恵美子

佳作 ネーミング 若い夢のせ店開く

田附町 大谷 みつ子

佳作 声はずむ 宇宙を見上げる子ら楽し

東沼波町 木原 正

佳作 光 さ す 更地に夢の設計図

犬上郡豊郷町 元 持 和子

佳作 光 さ す 辛苦に耐えた老の皺

新海町 野田 ヒサ子

佳作 声はずむ 独学一首今朝の欄

彦富町 池田 光雄

佳作 ネーミング 爽やかな風ノックする

東近江市 小林 清次郎

佳作 ネーミング カタカナ表示の店モダン

米原市 伊藤 尚典

佳作 声はずむ 「ただいま」飛んだカレーの日

蒲生郡竜王町 小森 政 枝

佳作 光 さ す 滾つ瀬に在る若葉影

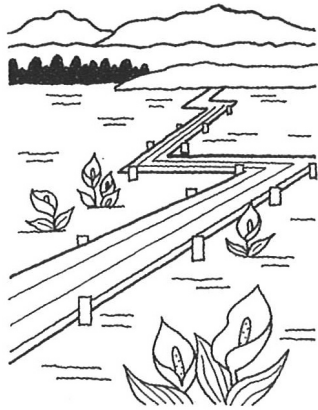
稲里町 覇流 不良者

佳作 ネーミング 先祖の名前も一字入れ

犬上郡豊郷町 北川 泰子

佳作 光 さ す 窮地を救う義援金

米原市 畑 中公 雄



《総評》

今回もご出句をいただきました愛好者諸氏のたゆまぬ意欲と情熱に敬意を表しますと共に深く謝意申し上げ、併せ選をさせていただく重責を痛感いたし居る次第でございます。

今回も皆様からの熱句を例年に習い、古株、西村両先生と不肖私の三名で精魂こめて選に当たらせていただきました。

総体的に年々優れた句が多い中、何時も申し上げております通り、選に入る句数は総出句数の十八%という窄き門であり、秀吟であっても寸陰の差で選外の止むなきとなった作品が、かなりの数にのぼるといふ辛苦の厳選でありました。

さて「冠句」の起源は元禄時代に京洛からはじまり上方一円にくつかの「派」ができながら文芸として大衆とともに広まっていたと文献に記されています。

書店や図書館では、俳句、川柳、短歌、詩、等のコーナーはありますが「冠句」はなかなか見つかりません。先師から教え伝え育まねながら、関西を中心に発達し現在に至っているということでしょうか。

前置きが長くなりましたが、当文芸冠句の部では、毎回三つの「冠題」が出されます。お気づきと思いますが、ここ七年間、それぞれ夫々の五文字の冠題の頭を「ひこね」として出題されています。

今回の三番目「ね」は「ネーミング」という新鮮な冠題が出され、そこから思いつかれる十二文字はさすがに多種多彩で、同類句もなぐ清新な逸句がたくさんあり新しい趣を感じいたしました。

浅慮ながら、冠句は季語・季節等にこだわることなく自由に詠む短詞文芸の一つであります。まず冠題の五文字をよく吟味熟慮して、それにふさわしい事柄や場面を新しく興して、心の中の気持ちや風景の楽しさまた身の周りで見つけた興味のあることがらを、ひとつの絵や詩のように言いあらわし、人の胸に残るような心打たれるような感動表現で「中七、下五の十二文字」にまとめていた、たく短い、たのしい心の詩です。

只、冠題にすぐ接続しない、標語調にならないように心がけて、創作心高く深くやさしく、どうぞ句友の皆さん、選外の方も紙ひとえ、めげることなく、来年もこぞつてご応募くださる事をお願い申しあげ拙いペンを置かせていただきます。

愚考短慮 今井三日月

選者吟

光 さ す 忍の一字が 受く誉

古株 鏡 水

声は ずむ 山びこ 連れた 夏帽子

西村 吟 雪

ネーミング 決断 新た 視野 広げ

今井 三日月

